

# KJ法による授業整理会の実践

理科・物理 渡會 兼也

本稿ではKJ法による授業整理会の実践について報告する。授業整理会にKJ法を導入することで、授業の反省だけでなく、改善の方向性を明確にできる。特に教育実習などで学生が授業を改善する必要がある場合には有効な方法になりうる。本稿では、教育実習生の授業整理会にKJ法を取り入れた際の実践を報告し、その利点や注意点について議論する。

キーワード：KJ法，整理会，教育実習

## 1. はじめに

KJ法とは日本の文化人類学者川喜田二郎氏（元東京工業大学教授）が考案した創造性開発（または創造的問題解決）の技法で、川喜田氏の頭文字をとって“KJ法”と名付けられた[1,2]。この方法はグループワークやブレインストーミングなど、多数の意見をまとめる際や新しいアイデアを提案する際の手法として多方面で利用されている。

私は最近2年の教育実習期間（2008年9月と2009年9月）に教育実習の授業反省会でKJ法の導入を試みた。本稿では、まずこのKJ法を授業整理会に導入するに至った動機を紹介し（第2章）、その後、実際の方法について説明する（第3章）。第4章で実際に実践を行った実習生へのアンケート結果を紹介し、それを踏まえた議論を第5章で行う。第6章は課題とまとめを行う。

## 2. 動機

本校は大学の附属学校であるため、毎年各教科（各教員）で平均2-5人程度の教育実習生を受け入れ、指導を行っている。平成20年度は私が担当する「物理」での実習希望者が多く、8人の指導を任される事態となった（平成21年度は6人）。これだけの人数になると授業後の整理会（反省会）での意

見集約だけでも大変な作業となる。通常の研究授業などの整理会では、授業者の意図や反省点について議論を行う（と思われる）が、教育実習では授業の反省と同時に次回に実習生が担当する授業への「改善の指針」が明確に示される必要がある。しかし、意見や指摘があまりに多いと授業者は反省点が整理できず、反省点や改善策が生かされないまま次の授業に臨むことも少なくない。ベテラン教員ならば、実習生の授業の問題点はピンポイントで指摘できるだろうが、（筆者のように）経験の浅い教員では指摘すべきポイントを見逃し、明確なアドバイスができないケースも多い。整理会での意見の集約を容易にし、改善すべき点が明確になる方法はないものだろうか。また、実習生の間で改善点を共有でき、何度も同じ指摘をせずにすむ方法を考えた。これがKJ法の導入に至った動機である。

## 3. 方法

一般的にKJ法は、次のような使い方をすると効果的であるとされている[3]。

1. 問題の正体がはっきりしない時。それを明確化する。
2. 問題はもやもやしたままでもよいから、とにかく紙切れに書き出していく。

3. 周辺情報を幅広く収集する。
4. カード化された情報は、バラバラなままディスプレイする。
5. バラバラなカード群の語りかけを素直な気持ちで聞き取っていく。
6. バラバラな情報群の中から、次第に紙切れたちが集まってきて、問題が形成され、構造化されるように思考する。
7. 構造化された問題から解決策を考える。

このような手順で、ある課題やテーマについてグループで取り組むことによって、衆知結集の効果や、チーム作りの効果を期待できる。上記の手順を教育実習生の授業後の整理会に導入する。

我々が行った手順は以下の通りである。

- (1) はじめに授業者本人が反省を述べ、それを大きく4つのカテゴリー（1. 授業態度 2. 授業内容 3. 授業準備 4. その他）に分類し、黒板に箇条書きにする。
- (2) その後授業を参観した実習生が気づいた点をそれぞれ2点程度（よかった点と悪かった点）指摘し、それを4つのカテゴリーに分類する（授業参観者は参観時に気がついたことを付箋紙に書いておく）。意見は他の人が指摘した点と被ってもよいことにし、同じ趣旨の指摘した場合は同じ場所（同じカテゴリーの領域）に貼る。
- (3) 以上の作業が終わった時点で、指導教諭（筆者）が黒板を見ながらコメントし、他の実習生が指摘していないポイントについて指摘やアドバイスを行う。

今回のやり方は厳密な意味ではKJ法ではない。しかし、多少やり方が異なっても、思考プロセスはKJ法と同じだと考えている。例えば、カテゴリーを予め設定せずに意見を集約してもよいが、予め設定したカテゴリーに分類すると時間短縮になる。また、授業整理会は何かアイデアを生み出す、と

いうよりも、反省点を明らかにし、次回の授業の改善につなげるのが目的であるため、カテゴリーが統一されている方がやりやすい。実際には実習生が議論を進めやすいように変えていったのである。

8人の実習生で行うと、最初は意見の集約で大体30分程度かかり、次の授業での改善点まで議論していると、合計で1コマ程度（50分）かかった。しかし、慣れてくると意見の集約は10分程度で終わり、問題点がすぐに明らかになった。

以下に、2008年の実習生（8人）が整理会での意見を箇条書きにまとめたものを紹介する。参考までに、授業は波の性質の単元で、授業後の反省会で出た意見をカテゴリー毎にまとめている。

#### ○本人反省点

- 時間配分がうまくいかない（序盤遅い）
- 発問した後の時間を有効に使えなかった
- 準備不足→授業内容の理解が足りてない→説明がしっかりできなかった
- 言葉を統一する必要があった→同じものでもいろいろ言葉で表わしてしまい、混乱させてしまった
- プリントのミスを訂正し忘れた

#### ○態度（よかった点）

- 波の発生を実際に見せた（3人）
- 説明が丁寧
- ペース配分が良い

#### ○教材（よかった点）

- 冒頭の動画
- 波の実演（2人）
- スライドが見やすい
- 動画やアニメーションを見せる前の説明が丁寧  
→生徒の目を引き付ける

×態度（悪かった点）

- 説明が丁寧過ぎた？
- 説明をもっと早く→その分を図の説明に
- 説明のテンポが遅い→丁寧に説明するところと流すところのメリハリ
- 黒板の図，文字がみにくい
- 生徒指名のやり方（前ばかり）
- 生徒に内容整理の時間をあげるべきだった

×内容（悪かった点）

- グラフ上の波の移動のイメージがわかりづらい  
→もっとわかりやすく説明を
- 平行移動する←実際に移動しているわけではない

#### 4. アンケート結果

実習生への簡単なアンケートの結果を集約したものを以下にまとめる。アンケートは2008年と2009年に実習に参加した14人の実習生に対して行った。

アンケート内容はKJ法を授業整理会で使用する際の利点と欠点，改善策を自由に記述してもらった。似通ったニュアンスの意見は同じ意見と解釈し，カッコ内（ ）の数値にカウントした。

Q1 KJ法の利点は何だと思いますか？（自由記述，複数解答可，括弧内の単位は人）

- ①反省点が一目でわかる（7）
- ②まとめやすい（6）
- ③短時間で内容の濃い反省（2）
- ④重複意見の回避（1）
- ⑤授業の見方が明確になる（1）

Q2 KJ法の欠点は何だと思いますか。

- ①カテゴリー分けが難しい（4）
- ②議論の形式をはっきりと定める必要性（3）
- ③議論の内容は残らない（3）

④項目の立て方が難しい（2）

⑤無理やり項目にあてはめている（2）

⑥黒板やホワイトボードがないと反省ができない（1）

⑦他人の意見に重ねづらい（1）

Q3 今後，KJ法による整理会の方法を改善するとしたらどうしたらよいと思いますか。

①生徒との関わりに関する欄がほしい（1）

②大きな付箋やカードを用意するほうが良い（2）

③話がまとまりすぎて議論が少なくなった（1）

④改善点まで指摘するとよい（1）

⑤自分なりに分類しなおす（1）

⑥さらに意見の違った人（他教科の先生や実習生）を加えることで改善の方向性が明確になるのではないか（1）

#### 5. 議論

KJ法で最も便利なのは，参観人数分だけ意見の集約を終えると，どの領域のどの指摘が多かったかが一目量然になる点である。授業を行った実習生は指摘が多かった部分が悪かった点であることがすぐにわかり，しかも反省点が文字として残る。これは実習生の意見（利点①，②）からも如実に表れている。また，コメントする側は，どのカテゴリーの話をするのかを明確にする必要があり，あいまいな話をしないようになる（利点③，④にも関連）。授業の見方が変わったという意見もあった（利点⑤）。ただ漠然と授業見学をするだけでなく，問題意識を持って授業を見ることができた，という意見は貴重である。

アンケート結果以外に，もう一つ利点を挙げるとすれば，指導教員が忙しくて時間が取れない場合でも黒板・ホワイトボード・ノートに意見を残しておけば，実習生同士で議論をすすめ，あとで授業担当者と指導教員の2人で見直すことが可能である。

欠点もある。意見を4つにカテゴリー分けすることで、逆にコメントが制限される、同じ意見が言にくい、メモすることに時間がかかる、などである(欠点①, ⑤, ⑦)。従来のKJ法では予めカテゴリー分けしないので、欠点①, ⑤は当てはまらない。また、意見がまとまり過ぎると議論が減ってしまい、気軽なことが言えない雰囲気が出来上がる可能性がある。確かに、KJ法での反省会の形式が確立されていないときの方が、実習生が色々な意見を言っていた気がする(ただ単に実習に疲れてきただけかもしれない)。様々な意見の集約の他に、議論の効率を量的にも質的にも高めるという要素も必要である。

Q3の整理会の改善についてであるが、①は何種類のカテゴリーを用意すべきか、という問題である。これについては、一般的なKJ法に従い、カテゴリーを設定しなくてもよい。ただ、新たなアイデアを生み出すわけではなく、限られた時間の中で、授業の問題点を明確にするにはある程度カテゴリーが分けられていても問題ないと思われる。また、⑤のように整理会の場合では、自分なりの分類にしておすことも有効だが、自主性に任される。⑥は、より多くの人が議論に参加した方がよい。他教科の実習生との整理会も非常に有効であろう。

教育実習を通じて学生をいかに成長させるか、という視点から教育実習のプログラム、事前・事後指導の工夫をしている大学もある[4, 5]が、教育実習指導の実質的なノウハウは実習生を受け入れる学校にも存在する。特に、毎年一定の人数の実習生を受け入れている大学の附属学校は実習指導におけるノウハウの宝庫である。附属学校が教育実習の指導方法を確立することで、教育実習のあり方も変わるかもしれない。実習生の指導法などのノウハウを学校単位で埋めるのではなく、全国規模で情報を共有することが今後の課題であると考えられる。

## 6. まとめ

今回は教育実習指導の際の授業整理会の手法としてKJ法を導入した。初めての試みで時間がかかった面もあったが、反省会では意見が整理され、これまでの実習に較べると改善のための方向性が明確になった。KJ法を整理会に利用するには改善点はまだまだあるが、議論の方法としては十分活用できることがわかった。今後もこういった手法を試すことで、整理会の効率を上げるだけでなく、実習生の授業の改善策の明確化と新しいアイデアを提供する手法としての利用法も考えたい。

## 謝辞

最後に、2008年度に金沢大学から来られた8人の実習生(後藤崇, 鈴木敬人, 仙波直人, 舍利弗祐介, 中村翔, 西岡康平, 八田周郎, 渡辺大輝, 敬称略)と2009年度の6人の実習生(加藤克将, 後藤春日己, 佐藤和弘, 鈴木太郎, 土屋智宏, 坪田創, 敬称略)の協力に感謝いたします。

## 参考文献

- 1) KJ法本部・川喜田研究所のウェブページ  
<http://www.kj-method.jp/>
- 2) 川喜田二郎: 発想法(1967), 続 発想法(1970), 中公新書.
- 3) KJ法正規コンサルティング会社(株式会社エバーフィールド)のWEBページ  
<http://www.everfield.co.jp/>
- 4) 吉田道雄, 吉山尚裕 グループワークを用いた教育実習事前事後指導 熊本大学教育実践研究, 第18号, 7-14, 2001
- 5) 谷塚光典, 東原義訓 ティーチング・ポートフォリオを活用した教育実習事前・事後指導の実践 信州大学教育学部附属教育実践総合センター 紀要『教育実践研究』 No. 3, 2002